

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4590500106		
法人名	株式会社和福祉サービス		
事業所名	グループホームひなた		
所在地	宮崎県小林市南西方6286番地1		
自己評価作成日	令和元年11月8日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 宮崎県介護福祉士会		
所在地	宮崎県宮崎市原町2-22 宮崎県福祉人材センター人材研修館内		
訪問調査日	令和1年12月16日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

小林市西部に位置する田園広がる中にあり、また霧島山が一望できる自然豊かな環境にあります。近くには小中学校や保育園、お寺、商店や企業、地区体育館やまちづくり協議会事務局などもあり、ホーム利用者は地域との交流も日常的にできており、併せて地域住民によるホームへの理解も協力もあります。
 そのような環境の中、利用者は野外散歩や菜園管理など思い思いの日常生活を、個人の生活のペースに合わせてながら支援する事を基本としています。併設しているデイサービスやグループホームなごみとの交流もあり、家族の面会も外出も日課にこだわらない支援の方法としています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは地区の自治会に加入しており、職員、入居者は散歩や買い物時、地域の人たちと日常的に言葉を交わし触れ合う機会が多い。近くの保育園児の散歩コースになっており、入居者とは和気あいあいとした雰囲気の中で交流ができています。年1回開催される夏祭り「なごみ祭り」では中学校吹奏楽部による演奏をはじめ、沢山の地域住民の参加があり大盛況である。職員は理念に沿った行動指針を意識しながら入居者と向き合っている。入居者の想いに添って自宅へ復帰するための準備を一緒に行っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本理念とケアの理念が、玄関に掲げられており、職員が常に理念を確認することができている。 ケアの理念は職員が話し合っただけで、把握していなかったり、実践できていないところもある。	理念は全職員で考え、具体的に「職員行動指針」も作成している。職員は仕事を始める前にその日の指針を決め、そのことを意識しながら入居者に接している。管理者は理念のアンケートを職員に取り、それぞれの理解度を確認することにも取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地区の自治会(区常会)に加入して、回覧板を回したり、地域の保育園や小中学校、まちづくり協議会との交流もおこなっている。なごみ祭りでも地域住民の参加があり交流が図られた。	自治会に加入し、回覧板を入居者と一緒に届けている。小中学生との交流や、地域の保育園児の散歩コースであり子供達が入居者に声を掛けている。近隣の商店に日々買い物に出かけている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域交流貢献活動としてなごみ祭りを開催し、地域住民との交流を深めている。また認知症サポーター養成講座の講師として参加できている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の内容や、委員の意見については、職員会議で報告があり、今後の運営やケアに活かされるようにしている。	運営推進会議には多職種のメンバーが参加し、議事録は全職員に回覧している。入居者が自宅に帰りたいという思いも本人からメンバーに話をし、今できることから地域と共に考え取り組むことに挑戦している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	特に管理者は市の長寿介護課や福祉課の生活保護担当者、地域包括支援センターと連携を図り、運営上のことや利用者のことに関して相談するようにしている。	市の担当者は運営推進会議のメンバーであり、管理者は積極的に不明な点を聞くように心がけている。そうすることで学びとなっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人の方針は、身体拘束抑制はぜっていにしないという方針であり、身体拘束抑制禁止委員会の中で明確に取り組んでいる。また職員も身体拘束抑制をしないケアについての取り組みを実践できている。内部研修でも身体拘束抑制禁止や不適切なケアをしないための研修を行っている。	身体拘束抑制禁止委員会は全事業所から2名ずつ参加し、3か月に1回開催している。管理者は不適切ケアが身体拘束に繋がることを理解し、職員の良いケアについては褒め、不適切なケアについては一人ひとりと話し合う機会を設けている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待については、不適切なケアのないように利用者の権利擁護の方針の中で、内部研修等において、職員の日ごろの接遇を振り返りながら言葉遣い等についての適正化を図り、職員の意識を高めるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	虐待が決して行われることのないように、権利擁護について、内外研修で意識を持ってもらうようにしている。今後も知識、意識を持てるように学びの機会を設けたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際に契約書の説明と重要事項についての説明を十分に行っており、報酬改定やホームの体制等の変更についても説明を行い同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	アセスメントした際に利用者のニーズを支援に取り入れているが、日々利用者の声を聴いていきたい。また家族が面会に来られた時なども、家族との会話の中で、意見を引き出すようにしている。	家族とは、電話・面会時等に細かい部分を伝えるようにしている。意思疎通困難な入居者には、その人の得意分野を情報収集し、発揮してもらうように働きかけている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表や管理者は、可能な限り職員とのコミュニケーションの中で職員の意見や提案を聴き、ホーム運営や利用者支援に反映させるようにしている。	月1回のミーティング等で、管理者は一方的にならないように意見を聞くよう心掛けている。職員は自分の希望で働き方を選んでいる。職員の提案で入居者の介護上必要な物品の購入ができています。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の勤務は職員個別の要望を聞き入れながら、夜勤の回数や休みの希望に配慮するようにしている。また記録の効率化のために、タブレットにおける記録を導入し、負担の軽減に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修は職員全員が年1回以上参加できるようにし、内外研修は年間計画の中で実施している。内外研修とも計画性を持たせている。また資格取得のための講座や認知症実践者研修など、積極的な取り組みを年次計画の中で行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム県西ブロックや県の連絡協議会、小林市内のネットワークなどに参加する機会を設け、職員が他の事業所との交流や連携が図れるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人家族には入居前にホーム見学をしていただき、ホームでの生活などに関する説明を行い、入居後も本人には日課や生活支援についての話をし、生活に不安のないように配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人家族には入居の際の契約や重要事項の説明の中で、ホームの仕組みや本人の生活について話をしている。また家族の希望や要望等に耳を傾け、不安のないように配慮している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	アセスメントに基づいた介護計画を本人とご家族に説明し、本人が何をしたいかななどの情報を引き出し、生活の中で必要なことを優先していくようにしている。当然に家族の思いにも配慮している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者の支援は生活の支援という考え方で、利用者ができることは尊重しながら、職員も共同生活者としての関係を築くようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族にはいつでも面会していただき、受診や外出など家族ができることをお願いしている。また利用者の入居前の慣習や習慣を大切にしながら、家族との絆や関係を維持できるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ホーム入居後も馴染みの理美容院や地域や知人との関係を維持できるように外出支援している。家族の協力も得ながら実践している。	入居者の行きつけの美容室への送迎を行っている。地域から頂いた野菜を調理している。特に地域があつてのホームであることを、代表者は職員に伝えている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の毎日の支援はマンネリ化のないようにし、個別に対応するようにしている。利用者同士も自然に触れ合うことができるように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も、入院入所先に面会に行くなどの関係性を築いている。また亡くなられた方のご家族にも、初盆の焼香やその後の訪問など、関係づくりをおこなっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者支援では日々マンネリ化になることもあるが、できる限り個別の意向に沿うように、散歩や外出をしている。しかし本人の希望があっても職員の体制などで意向に沿えないこともある。	入浴やおやつ等の時間等1対1になれる時にゆっくり話をして思いを引き出せるように努力している。職員も自分の親のつもりで接し、表情で感じ取れることがある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前のアセスメントは本人や家族、またはケアマネジャーなどの関係機関からの情報であり、本人のこれまでの暮らし方を新調し、入居後の生活支援に役立っているようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の支援では、本人の心身状態を確認し、日々の生活支援で本人の能力を引き出しながら、これまでできていたことを継続できるように支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	アセスメントに基づき、本人と家族の意向を尊重した介護サービス計画書を作成している。また定期的に介護サービス計画に沿った支援ができているかの評価(モニタリング)をおこなっている。	タブレットを使い記録がなされている。それを元に課題分析がなされ細やかな介護計画となっている。職員は介護計画に沿った記録を心がけている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録は常に日々の様子を密に記録している。記録はタブレット入力で、職員が記録を共有しながら、適切なサービスが提供されているか確認している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ホームの多機能的な地域還元策として、AEDの緊急貸し出しや、災害時の一時避難所的な対応など柔軟にできることを地域還元策としている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地元の小中学校、保育園との交流、地域の夏祭りの参加などふれあいや交流を図っている。また市の文化祭への展示や見学など十分に社会資源を活用できており、今後も積極的に地域資源を活用していきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は利用者ひとり一人が異なり、定期受診を家族とホームとの連携で行っている。また他科受診についても随時実施している。そのほか協力医療機関との連携も図りながら、利用者の健康管理や適切な医療が受けられるようにしている。	入居前のかかりつけ医を希望する人が多く、基本的には家族の受診をお願いしている。困難な時は職員が同行したり送迎を行っている。歯科・皮膚科の往診がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ホームには看護師の有資格者が3名おり、利用者の健康管理や医療機関との連携、家族または介護職との連携を図っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者の入院時に本人の情報提供を行い、入院中は随時面会して本人の状態確認に努めている。 退院の際には病院からの情報提供で、退院後の生活支援や健康管理が適切におこなえるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ホームでは未だ看取りの事例はない。ホームで指針を定め、本人や家族の意向に沿った支援ができるようにしているが、今後も看取りのための研修会に参加したり、内部においても指針に基づいた意識高揚を図るようにしていきたい。	看取り指針には、具体的な対処方法が細やかに示されている。ホームでの看取りの事例は無く、研修会への参加や内部研修の必要性を、管理者は感じている。	看取りに関する外部研修や、内部研修を行うことで、職員の看取りに関する不安を払しょくする努力を期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の急変時のためのマニュアルがあるが、内部研修では救急法やAEDの取り扱い、蘇生技術の定期訓練を、消防署の指導の下におこなっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	ホームでは年2回の総合防災訓練を実施し、消防署の指導の下、地域住民や消防団の協力も得ながら、利用者職員は避難訓練と緊急通報、消火器での消火訓練を行っている。	消防署や消防団、地域住民の協力を得て年2回の防災訓練を実施している。夜間訓練も行っており、食料品やコンロ等も準備されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の排せつの支援や入浴は、プライバシーを尊重して支援している。また居室の出入りのノックや声掛けをおこない、個人の持ち物についても、個人のものとして取り扱うように注意している。	尿汚染時等の対応には、最大限に誇りを傷つけない配慮や声掛けを行っている。職員も自分や自分の親がされたら嫌だろうと思うことをしないよう心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中では、利用者の思いは様々であり、言葉かけをして本人の意向を聞き出している。また利用者自身も、自分の気持ちを伝えることができるような配慮をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者個別のペースで暮らしの支援ができるようにしている。しかし職員は日々の日課に流されることもあるため、職員の都合になったりしていることもある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者は毎日の更衣も本人の気に入った服装を選択できるような支援をし、個人では化粧を施す支援もおこなっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	できる限り職員と一緒に食事ができるようにしているが、業務に追われて十分できないときもある。月に1回カレーの日を設けて、全職員と利用者が一緒に会話しながら食事ができるようにしている。またテーブル拭きや後片付けなども、可能な限り利用者をお願いしている。	カップラーメンの日、カレーの日を設け、月に1回ずつは自分で選んだり、職員全員と食事をする機会を入居者の希望で取り入れている。下膳をしたりテーブルを拭いたり、できることに自然に取り組んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分は利用者個人の合わせた食事形態にしており、それぞれ摂取量は毎食記録している。体調等で不足するような場合には厨房と連携しながら、摂取できるように工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食ごとに口腔ケアをおこなっている。利用者が自分で口腔ケアができる時は見守りをしている。口腔ケアについてはかかりつけ医や歯科協力医療機関との連携を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	昼夜とも利用者一人一人に応じたパターンをにより、できる限りオムツに頼らない排泄支援を心掛け、声掛けや誘導によりトイレでの自然排泄を支援している。	おむつに頼らない排泄を心掛けている。一人ひとりの排泄パターンを把握して声掛け誘導を行っている。現在、パットを利用している入居者はいるが、おむつ使用者はいない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	利用者個別に排便パターンを把握し、便秘の時には安易に緩下剤に頼らず、食事の工夫や散歩などの運動により、自然排便ができるようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は利用者に入浴の希望を聞きながら支援している。入浴できない方については、清拭や更衣を実施している。ただし入浴時間は午後であり、曜日や時間帯までの希望に沿っていない。	着替えは自分で用意してもらったり、選んでもらう。1対1の対応でゆっくり入浴してもらおうに心がけている。入浴剤やゆず湯等入浴を楽しむ支援を心掛けている。毎日入浴される方もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼夜逆転の習慣にならないようにしているが、利用者個人の自由な時間を損ねることのないようにし、また夜間良眠しやすいように、室温や寝具調整にも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者個人の内服薬の種類や効用、量などの確認を怠らないようにし、誤薬などのないように注意している。服薬確認ではチェック表に記入し、服薬後の状態の把握にも努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の利用者個別の楽しみ方は様々であり、個人の自由な時間を強制的に束縛するようなことを決してせずに、個人の楽しみ方を尊重して過ごせるように支援している。また食器洗いや、掃除、洗濯物たたみなどの役割を、強制することなくお願いしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	計画的にあるいは随時、季節に応じた花見や屋外ドライブなどをおこなっている。日によっては近隣の散歩をしたり、回覧板も徒歩にて常会に持って行くようにしている。そのほか本人の希望で買い物や墓参り、外食に行くこともある。	近隣の散歩や回覧板を届けている。定期受診の後に本人の行きたい場所へ行ったり、季節に応じた花見やドライブを行っている。墓の場所が分からない入居者には、家族の協力を得ながら墓参りの計画を立てようとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理は利用者自身で管理できる方は少額の現金を持ち、買い物などで使えるようにしている。ホームでの小口現金の預かりはしていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ホームの電話で家族等と会話するなどの支援をしている。 正月の年賀状を利用者本人から家族あてに書くようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホーム内はトイレや浴室、洗濯場の表示をするなどわかりやすい工夫をしている。手すりは居室や廊下にも設置されていて、居室からトイレ、居室から食堂などの導線も混乱することなく移動できる。また季節を感じられる掲示物もある。	共用空間は吹き抜けになっており、広々としている。小学生や中学生との交流の写真や「なごみ祭り」の写真が飾られ、入居者の視線の高さに合わせてある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者は日々自由な過ごし方をしており、食堂やリビングのソファでテレビを鑑賞したり、自室でテレビ鑑賞をしたりしている。また余暇活動では希望者のみの参加となっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は日当たりも風通しも良く、利用者個人に合った環境である。タンスや個人の持ち物などの調度品や電化製品も置いてあり、個性のある居室となっている。	居室は日当たり、風通しが良い。家族の写真や個々人の持ち込み物品があり、落ち着いた空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホーム内のトイレや浴室、洗濯室などには表示があり、居室入り口には自作の表札がかけてある。補助歩行者使用の方もいるため、移動に支障がないように物の配置などを工夫している。		